

## 発達障害児者を対象とした支援活動における持続可能性の追求に関する論考 ー岩手県内の支援団体の比較からー

佐々木 全\*, 三田 敏明\*\*

(2017年2月15日受理)

Zen SASAKI, Toshiaki MITA

Discussion on the Pursuit of Sustainability in Support Activities for Children with Developmental Disabilities:  
A Comparison of Support Groups within Iwate Prefecture

発達障害児者を支援する全国各地の支援団体及び岩手県内の支援団体では、運営上の行き詰まりから不本意な形で解散や活動の休止に至ったケースがある。また、活動中の市民団体においても、活動の持続のために一部の運営者に負担や心労があるケースがある。このことから、活動自体の持続可能性を担保するための「運営論」ともいえるべき具体的な運営方法の検討が必要である。

その足がかりとして、本稿では、支援活動における持続可能性の追求の指針を論考する。そのために、岩手県内で活動する支援団体のうち、規模や運営状況が対照的な2団体を事例として比較検討した。その結果、運営・実践上の内容や方法を規定するのは、市民団体のミッションであった。市民活動における持続可能性の追求は、自らのミッションと運営実態の適合を自己評価し、運営・実践上の内容や方法を最適化することによって具体化されることが望ましいだろう。

Key word：発達障害，インフォーマルな支援グループ，持続可能性，運営論

### I はじめに

発達障害児者に対する公的な支援は、2004年の発達障害者支援法や2007年の改正学校教育法を後ろ盾にした発達障害者支援センターの設置や特別支援教育の開始によって本格化した。しかし、それ以前から現在に至るまで、草の根的なネットワークを構築しながら支援活動を展開してきた親の会等のインフォーマルな支援グループ（以下、「支援団体」と記す）も健在であり、それらは発達障害のある児者及びその家族の支援ニーズに応

えるべく、独自の活動を企画・開催したり関係機関等との連携推進やロビー活動をしたりするなど全国各地で多様な活動を展開している。

例えば、岩手県では1990年前後に親の会、異分野多職種が学び合う研究会、子どもを対象とした支援活動が大学の臨床及び研究を起点として発足し活動を展開した<sup>1) 2) 3)</sup>。その後これらをモデルとした支援団体が県内各地で発足し活動を展開している<sup>4)</sup>。

さて、このような支援団体の活動では、その実践内容に着眼しそれを報告したり、そこでの支援の

\* 岩手大学大学院教育学研究科，\*\* 花巻市教育委員会

効果を検討したりする「実践論」の報告が多い<sup>5) 6)</sup>。<sup>7)</sup>。その一方で、全国各地の支援団体及び岩手県内の支援団体では、運営上の行き詰まりから不本意な形で解散や活動の休止に至ったケースある。また、活動中の市民団体であっても、活動の持続のために一部の運営者に負担や不安があるケースがある。このことから、活動の持続可能性を担保するための「運営論」ともいうべき具体的な運営方法の検討が必要である。しかし、運営論に関する先行研究は未だ少なく、親の会の存在意義の再考や活動の存続の方途について問題提起した報告<sup>8) 9)</sup>以来、いくつかの支援団体を対象とした調査や事例報告がある程度である<sup>10) 11)</sup>。

そこで、筆者らは、このような現状を補完すべく、市民団体の持続可能性追求のための足がかりとして、個別事例的な運営実態の情報を集積し相互参照のための資料を提出しようと考え、調査に着手した。本稿はその一環であり、支援活動における持続可能性の追求の指針を得ることを目的とする。

## II 方法

岩手県内で活動する支援団体のうち、規模や運営状況が対照的な2団体を事例として比較検討する。2団体とは「はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会（花童・風童）」と「A c t .」である。

これらに対して、本研究への同意を得た上で、その活動に関する記録資料を収集した。この資料は、運営者所有の運営実務の記録（活動計画や参加者の要望などのメモも含む）、公表されている実践記録（会報や実践報告論文など）であった。これらから活動の概要、活動実態、運営実態を抽出し、比較対照させ、両者の運営上の特徴を明示する。それをもとに持続可能性の追求における指針を考察する。

## III 結果

### 1 活動の概要

#### (1) 「はなまき軽度発達障害児の教育と生活を支援する会（花童・風童）」

花童・風童は、岩手県花巻市を拠点地域とし、2004年に設立した。そのパンフレットには、活動の目的に相当する記述として、「当事者や関係者のニーズにフィットする活動内容の提供をめざします」「活動を展開する中で当事者や関係者の、草の根的なネットワークを築きます」「この社会が当事者に対する理解を深め、行き届いた支援を実現するための啓発活動に努めます」とある。この事業は、発達障害児者のための休日活動であり、小中学生対象の活動と高校生から成人対象の活動をそれぞれ通年で月一回実施している。また、保護者のための日常的な相談窓口や語らいの場の提供、教員のための研修活動、関係者による研究会、情報誌の発行による啓発活動などを実施している。なお、運営者は、第二筆者であり、市教育委員会の教育相談員（特別支援教育にかかる巡回相談担当）を本業としていた。第一筆者は運営の補佐をしている。

活動の対象として、花童・風童では、「小中学生」「高校生以上の成人」「保護者」「教員等支援者」を想定している。それは活動の内容と対応している。また、これら活動の参加者は、第二筆者が花巻市内の小中学校等を巡回し、関わりを得た親子のうち支援の必要性があると判断された親子に活動を紹介することから始まった。しかし、その後は、教員による紹介や療育機関や医療機関や相談専門機関からの紹介が大部分を占めた。新規の参加を常時受け入れていた。また、活動への参加は、その後も継続されるため、小中学生は数年後にはほとんどが成人として参加するようになる<sup>12)</sup>。

なお、運営においては、第二筆者が「小中学生」「高校生以上の成人」「保護者」「教員等支援者」を対象とした活動の運営及び実践を主に担った。第二筆者は「教員等支援者」を対象とした学習会を補佐し情報誌の発行を担った。

## (2) A c t .

A c t . は、岩手県盛岡市を拠点地域とし、2010年に設立した。そのパンフレットには、活動の目的に相当する記述として「放課後をチョ～楽しもう！」とあり、放課後活動の充実を目指している。この事業は、発達障害児の小学生対象の放課後活動である。この内容として「タグラグビー」というスポーツに取り組んでいた。取組は6月～10月までの期間限定であり、隔週木曜日の17～19時までの実施であった。なお、運営者は第一筆者であり、活動当時、特別支援学校にて特別支援教育コーディネーターとして地域の巡回相談を担当していた。

「小学生」を対象とし、しかも初回参加のメンバーに固定した。この参加者は、そもそも第一筆者が本業の相談業務にて関わりを得た親子のうち支援の必要性があると判断された親子、ならびに希望者であった<sup>13)</sup>。

なお、A c t . は2012年に解散した。その解散は「ニーズの充足による活動の解消」であり、この時点で継続的あるいは発展的な活動を要望した参加者には、休日活動としてタグラグビーに取り組んでいる姉妹団体を紹介した。

## 2 活動実態の比較

両者を比較対照すると、花童・風童が総合的な内容の活動を展開しており、支援の対象は広く、不特定多数を想定している。一方A c t . では限定的な活動を展開しており、支援の対象は特定少数に限定している。このことを踏まえ、以下では、両者に共通する活動内容を焦点とする。

共通点は、小学生を対象として含むグループ活動を事業としている点である。また、いずれの活動も参加者及びその保護者から好評であり、固定的で持続的な参加者を得ていた。これは「持続する必要や価値の評価」といえた。

花童・風童では、月1回（年10回）、日曜日の9：30～11：30を活動時間とし、毎回異なる活動内容が企画されている。規模は20人の参加者に対して10名のボランティアスタッフが対応する。参加者

は、おおむね固定的であるが、流動もある。例えば随時の新規参加者の受け入れている。

A c t . では、月2回（隔週1回、6月～9月までの「シーズン制」、期間9回）、木曜日の17：30～19：00を活動時間とし、タグラグビー（ラグビーの簡易普及版）を題材とした一連の活動が繰り返された。期間半ばにゲストチームとの練習試合をしたり、最終回に姉妹団体との交流戦を実施したりした。参加者は6名で固定され、新規参加者は受け入れなかった。また、ボランティアスタッフ4名が固定的に対応した。

## 3 運営実態の比較

両者の運営実態に関する自己評価として、市民団体に対する運営実態調査<sup>14) 15)</sup>の回答をもって比較した。これを「コト（活動内容とその展開）」「モノ（会場、使用物品の確保）」「ヒト（運営・実働を担うスタッフ）」「カネ（活動経費）」の4観点で再編成し記した。回答は、「必要十分」、「最小限は満たしている（余力がほしいというニュアンス）」、「やや不十分（助力が欲しいというニュアンス）」、「不十分」の4件からの選択によった。

### (1) 「コト（活動内容とその展開）」

花童・風童では、毎回の活動内容を第二筆者が企画し進行した。この内容は活動レパトリーを紹介する書籍等を参照した。運営上、実践上の両面でこれを持続するための負担感、不安感があり、「最小限は満たしている」とのことだった。

A c t . では、活動内容をタグラグビーに特化した。毎回同一の活動内容であるために、活動の事前準備はほとんどなく、スタッフの労力を抑えることができた。また、その内容及びその展開方法は、エブリ教室で開発されたもの<sup>16)</sup>を借用したことで、各回の展開をスムーズにすることができた。また、活動の反復によって参加者の技能が高まるなどの成果もあり、対外試合などの発展的な活動も見込めた。運営・実践上の両面から「必要十分」とのことだった。

### (2) 「モノ（会場、使用物品の確保）」

花童・風童では、市教育委員会との連携によっ

て、活動内容に即した会場を安定的に確保できた。使用物品については、活動経費からの支出によって満たしていたり、会場から借用したりすることで調達した。いずれに関しても、運営上、実践上の両面から必要十分と自己評価とのことだった。

A c t. では、第一筆者の当時の所属機関が管轄する体育館を安定的に確保できた。内情を知るだけに使い勝手もよく、得点板やタイマーなどの備品も借用できた。いずれに関しても、運営・実践上の両面から「必要十分」とのことだった。

### (3)「ヒト（運営・実働を担うスタッフ）」

花童・風童では、第二筆者が運営業務を担い、保険手続き、保護者連絡、活動の全体計画、会計、用具の調達、会場の確保を行った。また、実働スタッフとして、第二筆者に加えて、地域の福祉や教育関係者有志が参加した。これは流動的な参加であり、毎回顔ぶれも変わった。このような綱渡り的な運営にあって、不安は絶えず、「やや不十分（助力が欲しいというニュアンス）」とのことだった。

A c t. では、第一筆者が運営業務を担い、保険手続き、保護者連絡、活動の全体計画、会計、用具の調達、会場の確保を行った。また、実働スタッフとして、学生や教員有志が固定的に参加した。少々流動的であったが随時4名のスタッフの参加が得られた。運営・実践上の両面から「必要十分」とのことだった。

### (4)「カネ（活動経費）」

花童・風童では、活動資金を参加者からの集金（年会費、活動ごとの実費）、助成金で賄った。そのうちの一部が、小中学生を対象としたグループ活動の予算として配当された。予算規模としては十分であり、「必要十分」との自己評価だったが、助成金の申請等にかかる業務に負担感があった。また、助成金は恒常的に得られるものではないことから、常に不安もあった。

A c t. では、活動資金を参加者からの集金で賄った。ここでの試算は支出の実績からして適切であり、運営・実践上の両面から「必要十分」とのことだった。

## IV 考察

市民活動における持続可能性の追求は、どのような方針をもってすすめればよいのか。二つの事例を比較した結果から考察する。

両者のミッションは、目的及び支援の対象の想定に反映されている。花童・風童では、不特定多数の潜在的なニーズを想定した。ここでは、恒常的なニーズへの対応が目指された。これによって、事業は多彩になった。また、小中学生を対象としたグループ活動では、参加者が多く、また、随時の受け入れによって流動的な構成となった。活動内容は随時構想し実施する単発的なものであった。実働スタッフの参加も不安定にして流動的であったが、毎回10名程度の人数の確保が命題となった。活動への賛同は、ミッションの達成を後押しするが、それに呼応して、運営条件である「コト」「ヒト」「カネ」各面において運営者の不安感、負担感が伴った。花童・風童では、ミッションに対する達成動機の強さによって、その運営が持続されていた。そこでの運営者の負担感や不安感は、持続可能性の追求過程においては否めない。運営条件である「コト」「ヒト」「カネ」について、効率的克つ効果的な運営方法の開発によって軽減、解消することをめざすことが第一の選択肢であろう。第二の選択肢としては、A c t. に倣い、ミッションの再定義によって、事業内容等をセグメント化することがあるだろう。

A c t. では、特定少数の顕在的なニーズを想定した。ここでは、特定された参加者に対して「放課後の充実」という限定的なニーズへの対応が目指された。これによって、事業は単一限定内容になった。また、活動内容に即したスタッフが恒常的に参加した。活動の時期を特定の時期に限定していたことも参加のしやすさとなったのではない。ミッションの特定は、参加者の特定、活動の規模、活動の時期なども規定した。それによって、運営条件である「コト」「モノ」「ヒト」「カネ」各面において運営者の不安感、負担感を回避していた。



いずれの状況においても、運営上、実践上の内容や方法を規定するのは市民団体のミッションであった。持続可能性の追求はそれぞれのミッションに応じた強さ、長さ、方法をもってなされるものである。そこに相応の持続動機が求められると言えよう。結論として、市民活動における持続可能性の追求は、自らのミッションと運営実態の適合を自己評価し、運営上、実践上の内容や方法を整合させ最適化することによるものである。

今後、市民団体の運営実態について、事例を通じて、そのミッションとの整合に着眼した運営方法の把握とそこでの工夫点を見出し、集積し相互参照のための資料としたい。

### 付記

本稿は、日本発達障害学会第50回研究大会におけるポスター発表の内容に加筆し、再構成したものである<sup>17)</sup>。

### 引用文献

- 1) 加藤義男 (1993): 学習障害 (LD) 児の現状と課題に関する一考察—通所指導教室の実践を通して—, 岩手大学教育学部研究年報, 53 (1), 123-138.
- 2) 佐々木全 (2002): 「なずな教室」における実践報告—言語の遅れを伴うADHD児の特性に応じた指導—, LD研究, 11 (1), 32-40.
- 3) 田中弘美, 加藤義男, 木村真, 那須弘明, 漆畑輝映, 佐藤正恵, 鈴木康也, 三田祐一 (2002), LD及びその周辺児が抱える問題と支援について, LD研究, 11 (1), 2-11.
- 4) 佐々木全 (2009): 発達障害児 (者) に対する, インフォーマルな支援グループの取組に関する検討—岩手県における「通所支援教室」の成果と課題, 発達障害研究, 31 (2), 125-134.
- 5) 佐々木全, 加藤義男 (2003): 「エブリ教室」における実践報告—高機能広汎性発達障害児に対する, 劇活動によるソーシャルスキル指導の試み—, LD研究, 12 (1), 15-23.
- 6) 芦澤清音, 宇根本聡 (2002): 思春期を迎えたLD児及びその周辺児の居場所作り・仲間作りの取組みLD研究, 11 (1), 49-58.
- 7) 木谷秀勝 (2008) 発達障害児への地域・家族支援の可能性を探る—長門市の発達障害児親の会「ブルースター」の活動から—, 山口大学教育学部副教育実践総合センター研究紀要, 26, 147-155.
- 8) 森野勝代, 高橋由美, 井上芳郎, 栗野健一 (2004): LD親の会にできることとは何か—関東ブロック専門委員会による親の会自己分析の試み2—, LD研究, 13 (1), 43-52.
- 9) 森野勝代, 吉田美恵, 新堀紘太郎, 栗野健一 (2004): LD親の会に集まる人々とは—関東ブロック専門委員会による親の会自己分析の試み1—, LD研究, 13 (1), 33-41.
- 10) 佐々木全, 佐々木章, 安部千恵子, 三田敏明 (2009): 軽度発達障害児に対する「SST教室あじっこ」の実践報告, LD研究, 18 (2), 147-154.
- 11) 佐々木全, 高橋祥子, 三田敏明 (2011): 軽度発達障害児に対する「わくわく教室」の実践報告, LD研究, 20 (1), 109-120.
- 12) 佐々木全, 三田敏明 (2015): 発達障害のある子どもたちを対象とした地域支援活動—市民団体「花童・風童」による地域の居場所づくり, 児童研究, 94, 91-97.
- 13) 佐々木全 (2012): 「A c t .」の運営状況, 年報花童・風童, 8, 42-43.
- 14) 佐々木全 (2012): 発達障害児 (者) に対する「本人活動」における運営実態—岩手県内8グループを対象としたアンケート調査から—, 年報花童・風童, 8, 27-41.
- 15) 佐々木全, 伊藤篤司, 今野文龍 (2016): 発達障害児に対する放課後活動「A c t .」の実践報告—実践の意義と持続可能な運営のための工夫—, 岩手大学教育学部研究年報, 75, 89-103.
- 16) 佐々木全, 名古屋恒彦 (2014): 高機能広汎

性発達障害児に対する「エブリ教室」の教育実践に関する報告(第18報)―单元「タグラグビー」における、支援方法としての「活動内容及び展開」の検討―, 岩手大学教育学部附属教育実践センター研究紀要, 13, 215-223.

- 17) 佐々木全(2015): 発達障害児者を対象とした支援活動における持続可能性追求について～岩手県内2つの支援団体における運営状況の比較検討から～, 日本発達障害学会第五〇回研究大会発表論文集, 79.